九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『御所本和漢兼作集』の構成について：『和漢朗詠集』・『堀河百首』との比較を中心として

木戸，裕子
鹿児島県立短期大学助教授

https://doi.org/10.15017/9405

出版情報：語文研究. 83, pp.12-22, 1997-05-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『御所本和漢兼作集』の構成について

――『和漢朗詠集』・『堀河百首』との比較を中心として――

木戸裕子

一

『和漢兼作集』には宮内庁書陵部蔵の『御所本和漢兼作集』と、それとは組織形態を異にする島津忠夫氏蔵の『別本和漢兼作集』の二種が知られており、両者とも孤本の零本である。このうち『別本和漢兼作集』（以下適宜『別本』と呼ぶ）は、身分によって分類された作者ごとに和歌、漢詩の順に配列されている。したがって、その構成方針は明らかである。

それに対して『御所本和漢兼作集』（以下適宜『御所本』と呼ぶ）は現存する巻一から巻十までが、春夏秋冬の四季に部類されており、もとは巻十一から巻二十までの雑部を伴った二十巻構成であったと推定されている。この構成は勅撰和歌集や先行する詩歌集である『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』と同じい。平安時代の勅撰和歌集、中でも『古今和歌集』についてはその構成、和歌の配列について詳細な研究がなされており、一つの集全体が織り成す世界が解明されている。[1] また、『和漢朗詠集』についても同様の試みがなされている。[2] 鎌倉時代に編纂された『御所本和漢兼作集』も、その構成が四季によるものである以上、そこには撰者による何らかの詩歌の撰択・配列の意図が読み取れるはずである。おそらくそこには、『御所本』が編纂された十三世紀後半の和歌や漢詩の状況を反映するものがあると予想できる。

本論考は『御所本』の構成・詩歌配列を、先行する歌集や詩歌集のそれらと比較して、その特徴を概観しようとするものである。

二

現存する『御所本』十巻は巻一から三までが春上中下、巻四と五が夏上下、巻六から八が秋上中下、巻九、十が冬上下の構成である。これらは一見したところ、下位の分類もなく、漢詩と和歌が混在しているようだが、詩歌の内容を検討すると主題によっていくつかの詩歌群に分類できる。分類が困難な箇所も存在するが、『御所本』の構成を考えるため、以下、詩歌の内容に即して、試みに主題ごとに分類する。漢数字は国歌大観番号、傍線を付けたものは前後双方の

主題に関わる詩歌である。疑問符を付けたものは一首のみであったり、歌群としての主題がはっきりせず、便宜的に分類したものである。

分類の方法は、和歌の題や漢詩の句題を基準にしたが、題が「春日」、「早秋」など比較的抽象的なものの場合は、具体的に詠まれている景物を優先する。無題詩、題知らずの歌などの場合も具体的に詠まれているものに基づいて分類した。主題の呼称は『和漢朗詠集』等を参考にした。

それぞれの主題には、参考までに歌と詩句それぞれの数を記した。詩が先になっている場合は、詩歌群が詩句から始まることを表し、歌が先になっている場合は歌から始まることを表す。ただし、各項目の中で詩、歌がそれぞれひとまとまりになっているわけではなく、混在している場合が多い。

巻一・春上

一～九　立春（詩3、歌6）　一〇～一四　早春（解氷）（詩3、歌2）　一五～一八　残雪（歌4）　一八～二〇　若菜（歌2、詩1）　二〇～二七　子の日（詩2、歌5）　二八～二九　春恩？（詩2）　三〇～四二　鶯（歌5、詩8）　四三～六〇　霞（詩11、歌7）　六一～六四　草（雪消？）（詩4）　六五～八五　梅（詩6、歌15）　八六～九五　春の月（詩4、歌6）　九六～一〇二　帰雁（歌7）　一〇三　春の月？（歌1）　一〇四～一〇六　水辺の春（詩2、歌1）　一〇七～一一〇　春興？（草？）（詩4）　一一一～一三七　柳（詩21、歌6）

巻二・春中

一三八～一四二　春の曙（詩3、歌2）　一四三～一四五　花を待つ（詩2、歌1）　一四六～二六六　花（歌49、詩72）

巻三・春下

二六七～二六九　落花の予感（歌3）　二七〇～三二七　落花（歌35、詩23）　三二八～三三九　三月三日（曲水）（詩11、歌1）　三四〇～三四八　桃の花（詩9）　三四九～三五一　春駒（歌2、詩1）　三五二～三五五　晩春（詩4）　三五六～三五九　残鶯（鳥？）（詩3、歌1）　三六〇～三六四　躑躅（詩4、歌1）　三六五～三六九　山吹（歌5）　三七〇～三七七　藤（詩5、歌3）　三七七～三八〇　暮春（歌2、詩2）　三八一～三八九　三月尽（詩6、歌3）　三九〇　閏三月（詩1）

巻四・夏上

三九一～三九二　更衣（歌2）　三九三～三九四　夏景（詩2）　三九五～三九九　新樹と残花（詩5）　四〇〇～四〇三　新樹（詩2、歌2）　四〇四　卯月の桃の花？（歌1）　四〇五　牡丹（詩1）　四〇六～四〇九　卯の花（詩1、歌3）　四一〇～四一七　郭公を待つ（歌8）　四一八～四四四　郭公を聞く（歌23、詩4）　四四四～四四九　橘（歌5、詩1）　四五〇～四五一　早苗（歌3）　四五二～四五四　菖蒲（歌2）

巻五・夏下

四五五～四五八　夏の夜（詩4）　四五九～四六三　夏の月（歌

4、詩1）　四六三～四六五　夏草（詩3）　四六六～四七三　五月雨（歌8）　四七二～四七七　郭公を聞く（歌6）　四七八～四八六　蛍（詩6、歌3）　四八七～四八八　常夏（歌2）　四八九～四九二　蓮（詩4）　四九三～四九七　水草（歌2、詩3）　四九八　蟬？（歌1）　四九九～五〇九　納涼（詩5、歌6）　五一〇～五一二　竹（歌3）　五一三～五一四　扇（詩2）　五一五～五一八　晩夏（歌4）

巻六・秋上

五一九　立秋？（歌1）　五二〇～五二三　露（歌3、詩1）　五二四～五三〇　初秋（歌3、詩4）　五三一～五三三　田家の秋（歌3）　五三四～五三七　秋興？（歌1、詩3）　五三八～五四四　七夕（歌5、詩2）　五四五～五四九　七夕後朝（歌5）　五五〇　秋風（詩1）　五五一～五五八　荻吹く風（歌8）　五五九～五六一　萩花（歌3）　五六二～五六三　秋花（詩2）　五六四～五六八　尾花（歌5）　五六九～五七二　槿（歌2、詩2）　五七三～五七七　蘭（詩5、歌1）　五七八～五八一　女郎花（詩2、歌2）　五八二～五八六　秋花見（歌3、詩2）　五八七～五九五　露（詩2、歌7）　五九六　秋の愁い？（歌1）　五九七～六〇四　秋の夕暮（歌6、詩2）　六〇四～六〇五　鶉（歌2）　六〇四～六〇七　鳥（歌3、詩2）　六〇八～六一六　虫（歌6、詩3）　六一五～六一六　猿（詩2）　六一七～六一九　秋水？（詩3）　六一八～六二三　秋風（詩2、歌4）

巻七・秋中

六二四～六三六　雁（歌5、詩8）　六三七～六三九　釈奠？（詩3）　六四〇　秋夜？（詩1）　六四一～七一六　月（歌27、詩49）　七一七～七二四　八月十五夜（詩6、歌2）　七二五　駒迎？（歌1）　七二六　八月十五夜（詩1）　七二六～七三二　月前秋思（詩7）　七三三～七三六　霧（詩1、詩3）　七三七～七四七　鹿（詩2、歌9）　七四八～七五六　田家（歌4、詩5）　七五七～七五八　秋雨（詩2）

巻八・秋下

七五九～七九一　菊（詩23、歌10）　七九二　月（詩1）　七九三～七九七　九月十三夜（歌2、詩3）　七九八～八〇一　月（歌2、詩2）　八〇二～八〇八　月前述懐（詩1、歌6）　八〇九～八一四　明け方の月（惜月）（歌6）　八一五～八二五　擣衣（詩3、歌8）　八二六～八五九　紅葉（詩22、歌12）　八六〇～八八九　散る紅葉（歌14、詩16）　八九〇～八九一　柿紅葉（詩2）　八九二～九〇二　晩秋（歌4、詩7）　九〇三～九一一　秋果つ（歌2、詩7）　九一二～九一七　九月尽（詩3、歌3）

巻九・冬上

九一八～九二四　初冬（詩4、歌3）　九二五～九三六　時雨（詩1、歌11）　九三七～九六四　落葉（詩19、歌9）　九六五～九七三　残菊（歌2、詩7）　九七四～九七七　寒草（歌4）　九七七～九八一　霜（歌2、詩3）　九八二　寒草？（詩1）　九八三～九八八　千鳥（歌6）　九八九～九九一　水鳥（詩1、歌3）　九九三～九九四　鶴？（詩2）　九九四～九九五　嘆老？

（詩2）　九九六～九九八　霜（歌3）

巻十・冬下

九九九～一〇〇五　氷（歌4、詩3）

春部の「花」、「落花」、夏部の「郭公」、秋部の「月」、「紅葉」などはもう少し細かな下位分類ができるはずだが、それらの検討は別稿にゆずる。また、春部上や秋部上・下などで細かく分け過ぎたところがあるかもしれない。

三

先述のように『御所本』は漢詩と和歌のアンソロジーという点で、『和漢朗詠集』との関連が考えられる。零本である本書は本来二十巻で、失われた後半十巻は『和漢朗詠集』と同じく詠物の詩歌を集めた雑部中心のものであったであろうとも推測されている。[3] 実際、『御所本』所収の漢詩句は『和漢朗詠集』、『新撰朗詠集』と共通するものが多い。[4] そこで、『和漢朗詠集』（以下適宜『朗詠集』と呼ぶ）の上巻の四季の部立と、右に試みた『御所本』の主題配置とを比較してみると、重なり合うところが多いことに気付く。

『朗詠集』上巻の部立は次のとおりである。＊印を付けた部は『御所本』と共通する部である。

春　＊立春　＊早春　春興　春夜　＊子日　＊若菜　＊三月三日付桃　＊暮春　＊三月尽　＊閏三月　＊鶯　＊霞　雨　＊梅　紅梅　＊柳　＊花付落花　＊落花　＊藤　＊躑躅　＊款冬

夏　＊更衣　首夏　夏夜　端午　＊納涼　＊晩夏　＊花橘　＊蓮　＊郭公　＊蛍　＊蟬　＊扇

秋　＊立秋　＊早秋　＊七夕　＊秋興　＊秋晩　＊秋夜　＊十五夜付月　＊月　九日付菊　＊菊　＊九月尽　＊女郎花　＊萩　＊蘭　＊槿　前栽　＊紅葉　＊落葉　＊雁付帰雁　＊虫　＊鹿　＊露　＊霧　＊擣衣

冬　＊初冬　冬夜　歳暮　炉火　＊霜　雪　＊氷付春氷　霰　仏名

こうしてみると、『朗詠集』の部立六十六項目のうち五十一項目が『御所本』と一致することがわかる。『御所本』の主題配置は、仮に項目立てしたものではあるが、『朗詠集』に一致する部はほとんどが相当する歌・詩句ともにまとまった群を成しており、項目として認定する妥当性はあると考える。

これらのうち、春の「款冬」、秋の「秋晩」「落葉」にあたる部は『御所本』ではそれぞれ「山吹」「秋の夕暮」「散る紅葉」とした。『御所本』の場合、「款冬」は相当する漢詩句がなく山吹を詠んだ和歌のみであり、「秋晩」も相当する詩歌群八首のうち、和歌四首が第五句「秋の夕暮れ」で終わっているからである。「落葉」は『御所本』の場合、冬部にも「落葉」の詩歌が採られており、それと区別するために「散る紅葉」とした。また、夏の「郭公」は『御所本』がでは「郭公を待つ」「郭公を聞く」の二部に分けている。

もとより、『御所本』が零本ながら十巻千五首の詩歌を有するのに対し、『朗詠集』は完本で上下二巻八百四首、四季部類の上巻だけでは三百七十六首の詩歌を載せるのみであるから、その部立の項目数も違ってくるのは当然であろう。それを考慮すれば、『朗詠集』の部立の大半が『御所本』の主題配置と一致しているということは、『御所本』が基本的に『朗詠集』の部立を踏襲していることを意味していよう。

また、これらの部立は個々の項目のみならず、配列においても概ねの一致が認められる。先に挙げた『御所本』の主題配置から『朗詠集』上巻に一致するもののみを順に挙げれば、

春上　立春　早春　若菜　子の日　鶯　霞　梅　柳
春中　花
春下　落花　三月三日　躑躅　山吹　藤　暮春　三月尽　閏三月
夏上　更衣　郭公（を待つ、を聞く）　橘
夏下　夏の夜　蛍　蓮　蝉　納涼　扇　晩夏
秋上　立秋　露　早秋　七夕　萩花　槿　蘭　女郎花　秋の夕暮　虫
秋中　雁　秋の夜　月　八月十五夜　霧　鹿
秋下　菊　月（再出）　擣衣　紅葉　散る紅葉　九月尽
冬上　初冬　霜（二箇所）
冬下　氷

となる。ただし、大きな違いとして、『朗詠集』が、季節の推移を表す節句や行事の部を先にし、その後に「鶯」「霞」など季節の景物を配列しているのに対し、『御所本』では景物も含めて、全体を季節の推移に従って配列しているということが挙げられる。

『朗詠集』上巻の、「先ず月令ならびに節句の意識によって展開し、その後季節の天象・草木を配置する」という方法が、中国の類書を投影するものであるということは川口久雄氏によって指摘されている。[6] それと比較すると『御所本』の方法は、中国の類書の部類意識をよりいっそう排したものであるといえよう。

『朗詠集』の部立を踏まえつつ、より中国類書からの影響を逃れているという傾向は、『御所本』の詩歌群の主題で『朗詠集』上巻の部に一致するもの以外の項目からも判断できる。それらのうちいくつかは『朗詠集』では下巻雑部の項目になっているのである。

前と同じく『御所本』からそれらの項目を挙げると

春上　草　夏下　竹　秋上　風　猿　秋中　田家　冬上　鶴

これら六項目は『朗詠集』では、田家を除けば下巻の始めの部分、天象と動植物の項の半分を占める。すなわち、『御所本』においては景物はできるかぎり、四季の推移の中に配列しようとする、四季重視の意識がうかがえるのである。

四

前章では部立の内容に着目して『御所本』と『朗詠集』との相違を検討したが、両者の違いは和歌と漢詩の配列についても見ること

ができる。

周知のとおり、『朗詠集』では同じ項目の中では詩句が和歌の前に置かれ、また詩句、和歌はそれぞれ作者の時代に順に配されている。[7] それに対して『御所本』では先に述べたように同じ主題の詩歌群と認め得るもののなかでも詩句と和歌とが混在しており、また作者の時代による配列もなされていない。しかしながら、まったく無秩序に並べられているわけでもなく、ここでも時間の推移を基本とする意識が働いている。

冒頭の立春の詩歌群を例に取ってみる。[8]

一　立春〔十二月廿六日〕　菅原道真

誣ひて告ぐらくは浪の氷の下より動がむことを
暗に思へらくは花の雪の中に在りて開かむことを

二　百首歌　藤原道家

久方のあまのとあけていづる日や神よのはるのはじめなるらん

三　藤原俊成

あまのとのあくるけしきものどかにて雲井よりこそ春はたちけれ

四　題しらず　源師俊

けさ見ればそらのけしきのしるきかなかすみやはるのすがたなるらん

五　元日賜宴　三善清行

酔はずんばいかでか辞せむ温樹の下
建春門外雪春を埋む

六　草樹暗迎春　紀長谷雄

庭気色を増せば晴の沙緑なり
林容輝を変ずれば宿雪紅なり

七　屏風の歌　源順

昨日までゆきにこもりしみよしのの霞はけさやたちはじむらん

八　立春の心を　宗尊親王

けさ見れば雪げにさえし雲もなくなぎたる空にはるはきにけり

九　百首御歌　亀山上皇

山のはの霞はとほきへだてにてわがやどよりぞ春はきにける

これら九首のうち題に「立春」とあるものは一番と八番だけだが、他の歌も「春のはじめ」、「春は立ちけれ」、「春は来にける」などの語により立春の歌であることは明らかである。

一番の道真の歌は題に「十二月二十六日」の注がついていることからわかるように、年内立春の詩である。『朗詠集』も冒頭立春の部の第一句は紀叔望作の年内立春の詩句であり、『御所本』はそれを襲っているものと思われる。[9] また、作者道真は『御所本』の作者表記では「聖廟」と記され、しかも他の作者とは違い左注の形で書かれる特別な存在である。巻頭に道真の詩句を置くのは、『御所本』の漢詩重視の態度という以上に、当時の道真崇拝、天神信仰を反映していよう。

その後和歌が三首続く。これらは年内立春の歌とは認められないが、「天の戸あくる」、「神代の春」という神話的表現により冒頭部にふさわしい歴史認識が感じられる。三首に共通するのは「天から来る春」である。

続く二つの詩句は一見立春と無関係に見える。しかしながら、五

番の清行の句は一番の道真の詩句を受けて、節月的な春の始まり、すなわち年始である年内立春から、暦月的な年始である元旦を題とすることにより、本格的な春の始まりを宣言するものである。また、六番の長谷雄の詩句は『朗詠集』では早春の部に置かれているものだが、『御所本』では題の「迎春（春を迎ふ）」により、立春の詩歌群に配列したものであろう。この詩句は五番の「雪春を埋む」を受けて「残んの雪」を詠じる。

七、八、九番は再び和歌である。七、八番は、五、六番の詩句から「雪」の語を承けている。が、五、六番が「残んの雪」を詠じたのに対し、二首は雪気（ゆきけ）のない春へと展開していくのである。そして、九番で、これまで空や山の向こうに来ていた春が「我が宿」から来ると、身近な春の到来を告げて、立春の部を終わるのである。

このように、『御所本』では、詩歌はその内容の関連によって配列されている。しかもここでは、敢えて詩句と和歌とが交互に混ざるように配慮されているらしい。内容の関連によりながら、かつ『朗詠集』のように漢詩句を先に、和歌を後にする配列も考えられるからである。この詩歌群のうち、詩句一、五、六番はこれだけで一連の繋がりをもっている。すなわち、年内立春→雪中の元旦→宿雪という展開である。一番と五番の詩句にはさまれる三首の和歌は前述のごとく、年内立春を詠んだものではないので、後の七、八、九番の和歌と一まとめにして詩句の後に配置することもできる。しかも、その方が四番歌に詠まれる「かすみ」から七番歌の「霞」へと内容的にも滑らかに繋がる。あるいは、編纂の過程で、先ず、詩句、和歌を別々に配列した後、詩句と和歌とが不自然でなく展開するように切り継いでいったのかもしれない。

右に見た立春の詩歌群は漢詩句・和歌・漢詩句・和歌の配列であったが、和歌で始まる部もある。紙幅の都合で細かな分析は省くが、巻六秋部上の五三八番から五四四番までは七夕の詩歌群として認定できる。ここは五三八から五四〇番までの和歌、その後五四一、五四二番の二つの詩句をはさんで五四三、五四四番の和歌の計七首で、七夕の二星の逢瀬を時間の推移に従って描いている。

『御所本』の全てにわたって、ここに述べた時間の推移や内容の連関による配列が当てはまるのかどうか、特に、二章に挙げた主題の分類配置のうち、疑問符を付けた箇所については、今後詳細に検討する必要があるが、原則として右の傾向は認められる。

五

三・四章において、『御所本』の構成を考える場合、基本的に『和漢朗詠集』の部立を踏まえていること、ただし、『朗詠集』のそれよりもいっそう四季の推移を重視した配列になっていて、漢詩句と和歌との配列の優先順位もないことを検証した。

この違いは所収詩歌数の多さとあいまって、『御所本』に部立の項目数の多様性をもたらしている。先に述べたごとく、『御所本』と『朗詠集』とでは五七項目にわたって部立が共通するが、『御所本』にはそれ以外の主題に分類できるものも多数存在するのである。それら、『朗詠集』にない主題と他の作品との関係を考えてみたい。

『御所本』が編纂された鎌倉時代は題詠による歌合や百首歌などが和歌製作の主流であった。『御所本』所収の和歌の詞書にも百首歌や歌合の場の作である旨を記したものがまま見られる。このうち、

題詠それも組題による百首歌は院政期の『堀河百首』がその始まりであり、その組題は後代の規範ともなった。[9]従って、『堀河百首』の題とその配列をもって、院政期から鎌倉時代にかけての和歌の主題や歌集構成の一典型と見なすことができるだろう。なお、『堀河百首』の部立、就中、雑部の部立が『和漢朗詠集』に依拠していること、しかし『朗詠集』だけではなく、勅撰集の『堀河百首』以前の百首歌や『古今和歌六帖』に見える分類された歌題も源泉となったことなども同時に指摘されている。[10]

そこで、『堀河百首』の題と共通する『御所本』の主題のうち、『朗詠集』の部立に見えるもの以外を挙げると、

春部　残雪　春駒
夏部　卯花　早苗　五月雨
秋部　薄（尾花）　荻（荻吹く風）　駒迎
冬部　時雨　千鳥　水鳥

（　）内は『御所本』の主題

の十一題になる。これらは何れも院政期以前は漢詩にはほとんど詠まれない題である。院政期の漢詩集である『本朝無題詩』や『法性寺前関白御集』になって「卯花」や「時雨」などが漢詩の素材としても少しずつ扱われる様になる。その意味では、極めて和歌的な題といえるであろう。なかでも、「春駒」、「早苗」、「荻」の三題は『堀河百首』以前の歌集、歌合、百首歌においてもあまり取り上げられない題であるという。[11]従って、これらの題は特に院政期以降の和歌のものであるといえる。実際、『御所本』においても、これら三主題の詩歌群は和歌のみで漢詩句のないものばかりで、漢詩の題材としては熟していないものと考えられる。

では、『御所本和漢兼作集』の構成と『堀河百首』の構成とに直接的な関連はあるのだろうか。『堀河百首』の四季の部七十題の内、『御所本』の主題と一致するものは右の十一題を含めて四十六題である。『御所本』の巻十冬部下は冒頭七首のみで残りは散逸してしまっているので、あるいはもう少し一致する題は多かったのかもしれない。また、先に三章で見たとおり、『御所本』の主題は『和漢朗詠集』の部立を踏襲しているものの、『朗詠集』が、節句や行事を先にし、その後で景物を配置しているのに対し、『御所本』は行事についての主題も景物の主題も全て合わせて季節の推移に従って配列するという違いがあった。『堀河百首』では節句や行事を題にしたものは少ないが、『御所本』同様に行事と景物とを合わせて季節の推移に従って組題を構成している。

『御所本』の主題分類が『堀河百首』を直接に踏襲しているとは、なお断言できないが、百首歌の規範として意識することはあったのであろう。

ただし、『御所本』では四季の各部に配置された「竹」「鶴」「田家」が、『堀河百首』では『朗詠集』と同じく雑部に置かれている。これについては『御所本』の後半部分が失われているので推測の域を出ないが、先にも述べたごとく、季節の推移を表す景物は可能なかぎり四季部に配列しようという『御所本』独自の方針があるのではなかろうか。

『御所本』と『堀河百首』との違いは他にもある。それは巻頭の「立春」の扱いである。四章で見たように、『御所本』の巻頭には、

同じ立春でも「年内立春」の詩句が置かれている。それに対して『堀河百首』の「立春」題では、特に「年内立春」は意識されていない。出詠歌人十六人のうち、年内立春の歌を詠んでいるのは、四人目の源師頼「よし野山つもれる雪の消えゆくはまだふる年に春や立つらん」だけである。『朗詠集』の部立と密接な関連があるとされる『堀河百首』の組題であるが、その内容までは配慮しなかったのであろうか。田中新一氏によれば、節月的意識による一年の始まり、すなわち春の始まりである「年内立春」は、院政期以降消えてしまい、「年内立春」は「旧年立春」となり冬の部に入れられてしまうという。[12] そうであればなおさら、鎌倉時代成立の『御所本和漢兼作集』における巻頭が「年内立春」の詩句であることの意味は大きい。[13]

六

前章までで『御所本』と『朗詠集』、『堀河百首』との関連を検討し、その主題分類や構成にある程度の影響関係があるのではないかという結論に達した。しかしながら、それならば何故、『朗詠集』や百首歌のような細かい部類をせずに、春・夏・秋・冬という大きな四季部類だけにとどまったのか、という疑問が残る。『御所本』のような形態の漢詩句と和歌のアンソロジーとしては『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』の両朗詠集しか存在を確認できないことを考えればなおさらである。

単純に考えると、『御所本』の構成が未完成で、細かな部立をしないままでおわってしまったようにも思える。しかし、二章、四章で見たように、『御所本』の各巻は主題によってまとまった詩歌群に分類することができ、しかもその詩歌群内でも和歌と漢詩句とは時間の推移を基本として前後の詩歌の内容に配慮して配列されているのである。ここまで意識的に主題別に配列するのであれば、それを部立てして目録を付けるのは簡単なことのはずである。つまり、『御所本』は主題の分類やその配置について『朗詠集』をある程度踏まえながら、全体の形態においては『朗詠集』と違うものを目指したということが考えられる。

では、『御所本』が目指した形態とは何だったのかといえば、推測になるが勅撰和歌集の形だったのではなかろうか。四季部の各季節を時間的推移に従って細かな主題を設定、配置する、といえば『古今和歌集』の構造が思い起こされる。しかも、四章で確認した、それぞれの主題に統括された各歌群内部の歌も前後の内容の関連によって結びつけられるという下部構造も『古今和歌集』が確立したものであった。[14]

この、「時間的推移による配列」はきわめて歌集的なもので、漢詩集では見られないものである。何故なら、先に述べたように漢詩集の場合、どうしても中国の類書の部類の影響を受け、四時とその景物とを分離した部類になってしまうからである。平安時代の『本朝麗藻』『本朝文粋』などの総集、『江吏部集』などの別集はどれも、節句に関する作のみを集めた四時部の後に地部や草木部などの景物に賦した作を集めた部を置いている。和歌を交えた『和漢朗詠集』でさえ、中国類書の影響を排することはできなかった。

それに対して『御所本』はいっそう和歌集よりの構成を取っている。景物も含めて時間的推移に従った配列を行うために、漢詩句と和歌の優先順や作者の時代順にはこだわっていない。一つの主題の

中に必ずしも和歌と詩句の両方を要求しないために、主題の種類も『朗詠集』に比べて豊富になっている。もちろん、これには院政期以降の漢詩が和歌の素材を賦し始めたことも大きく寄与している。

以上、『御所本和漢兼作集』の全体を検討した結果、所収の詩句と和歌との数だけを見れば漢詩優位のように見えるが、各巻の詩歌の配列、構成を見てみると、かなり歌集的な性格の強い作品であることが言えると思う。さらに憶測を逞しくすれば、『御所本』の失われた後半部分は、従来いわれているような『朗詠集』型の雑部ではなく、勅撰和歌集のように、巻ごとに「恋部」「賀部」「哀傷部」などの部に分かれていたのではないかとも考えられる。

漢詩句と和歌とのアンソロジーである『御所本』の構成が勅撰和歌集を意識したものであるとするならばその意図はなんだったのか。零本で序跋も持たない『御所本』の編纂意図は今となっては知る由もないが、『御所本』の成立は、いわゆる反御子左派によって多くの歌集が編まれた時期とほぼ時を同じくする。それら反御子左派の手になる歌集のうち、特に『万代和歌集』や『秋風和歌集』は御子左家の藤原為家に対抗する目的もあって勅撰集を意識して編纂された。反御子左派の中心人物である藤原光俊と深い関係があるという『御所本和漢兼作集』は、和漢兼作の人々の詩歌を勅撰集の形式で集める、という、反御子左派による新しい試みだったのであろうか。

(1) 松田武夫氏『古今和歌集の構造に関する研究』風間書房　一九六五年
『新釈古今和歌集上下』風間書房　一九六八年
新井栄蔵氏「古今和歌集四季の部の構造についての一考察対立的機構論の立場から―」(『国語国文』一九七二年八月号　後に有精堂『日本文学研究資料叢書　古今和歌集』に再録)

(2) 奥村郁子氏「『和歌朗詠集』―「郭公」をめぐって―」(『古典の受容と新生』)明治書院　八四年

(3) 三木雅博氏『和歌朗詠集とその享受』勉誠社一九九五年　I『和漢朗詠集』の構成

(4) 『笠間影印叢刊　御所本和漢兼作集』解題　4頁

(5) 注3前掲書解題9頁

(6) なお、『和漢朗詠集』と『新撰朗詠集』の部立は同じである。

(7) 日本古典文学大系『和漢朗詠集　梁塵秘抄』解説　21頁

(8) 福田俊昭氏「『和漢朗詠集』の構成について」(『古典の変容と新生』)明治書院　一九八四年
漢詩句の訓みは新編国歌大観の『和漢兼作集』によった。作者名は本文の官職名を省いた。

(9) 『朗詠集』冒頭が年内立春の詩句で始まるのは、『古今集』巻頭歌が年内立春の歌であることを踏まえるものであるが、『古今集』以外の八代集において巻頭歌が年内立春の歌であるものはない。

(10) 橋本不美男・滝沢貞夫両氏『校本堀河院御時百首和歌とその研究（本文・研究編）』笠間書院　一九七六年　研究編第一章三三三頁～三三四頁

(11) 注10前掲書三三七頁～三四〇頁

(12) 注9に同じ

(13) 『平安朝文学に見る二元的四季観』風間書房　一九九〇年　終節「幻と消えた二元的四季観」

(14) 鎌倉時代の百首歌で、『和漢兼作集』に密接な関係がある真観（藤原光俊）も出詠している。『宝治百首』は春部が「歳内立春」で始まる。

(15) 注1前掲書、注2の三木雅博氏論文によれば『朗詠集』の場合、新井氏のいう「循環的構造」「対立的構造」をも意識されているとのことだが、『御所本』では、冬部下の大部分が失われていることもあり、それ

らの構造は確認できない。

付記：本稿は平成八年度科学研究費（奨励研究A）による研究成果の一つである。